【教育長賞】六年間の思い出の時間

桜井小学校　田中　愛莉

私は、毎日の給食の時間がすごく楽しみでした。とくに、ビビンバの日は四時間目のとき、すごく手を上げたりなどをがんばったりして、わくわくがとまりませんでした。たくさん考えてつくってくれている食べ物は毎回あたたかいからこそ、愛のぬくもりが伝わってきます。六年間で私は、毎日給食じゃんけんでたたかってきました。安城市の特産品を使った料理は、クラスのみんながとても大よろこびで、私も心がドキドキします。だからこそ、栄養を考えてくれた栄養士さんにも、一度会って「いつも、私たちの健康を考えてくれてありがとうございます。」と伝えたいです。学校の給食のおかげで、にがてだったトマト、その他の野菜、くだものが食べられるようになり、好ききらいをなくすことができたので、これからも健康にすごすためにも、おかしばっかり食べずにふだんの生活でも、いしきしてとりくんでいきたいです。世の中に好ききらいをしている人は、たくさんいるのです。ですが、個人の意見でもあります。例えば「なぜ、好きなものだけ食べてはいけないのか。」この意見は、私も思っていたことでもあるのです。義務ではないのですが、この言葉は私たちが健康に生きるために、生まれた言葉ではないでしょうか。学校の給食も考えられます。私が六年生の前期図書委員、読みきかせの本を選ぶ時に「給食番長」という本に出会いました。この本は、給食をつくってくれるおばちゃんたちに感謝するということを伝えたいのかなと思います。この本と私たちの生活で関することは、私が給食委員のきかくで、かたづけを体験したとき、たくさんへらしている給食がありました。やっぱり「もったいないな」とも思いました。だったら、給食を「残さない」、つくってくれた人をかなしませないようにするのだとしたら、私がいしきすることで「残す」ではなく「減らす」ようにしています。「残す」と「減らす」のちがいがどれだけ大きいか、この六年間で学習しました。食品ロスにならないように日々、くふうをつみかさねています。この六年間の給食の時間は、命に感謝し、友達との絆が深まる大切な時間でした。小学校では、命のありがたみをもち、食べてきました。コロナのじきとぶつかり、もく食をしていて、なかまとしゃべれない時間がありましたが、ずっと心を合わせて「いただきます。」「ごちそうさまでした。」と声に出し、みんなとすごした時間はたからものだなと感じます。中学校まで残り約一年。中学校でも、命に感謝しながら、心と声と手を合わせ、「いただきます。」「ごちそうさまでした。」とあいさつを大事に給食を食べていこうと思いました。